

“水俣湾はいぜん危険”

入鹿山、緒方、六反田の三教授

熊太サヨナラ 記念講演

定年退職で熊太を去る入鹿山（体腎医学研究所・体質生理学）で、熊太サヨナラ記念講演の三人の
 明教授（衛生学）と緒方組長教授（れに昨年八月学長を兼ねた六反田）が「サヨナラ記念講演」が二十二日



入鹿山教授



緒方教授



六反田教授

午後一時から同大医学部第三講堂で行われた。この中で、水俣病学者として有名な入鹿山教授は「三十六年以降水俣病患者発生の報告はないが、水俣湾は依然危険な汚染状況にある」と痛感して注目された。

入鹿山教授はまず三十五年から魚介類の水銀汚染状況を説明し、アセチルアセチル下の製造が中止された四十三年から水俣湾の汚染度は急激に落ちており、昨年の調査ではアサリ貝の汚染度は二・五PPMにまで低下している。しかしこれは「〇・五PPM以上のマクロは輸入禁止」という基準からすれば、五倍もの水銀が含まれていることになる。三十六年以降水俣病患者は出ていないが、こうした貝を消費した場台、大きな危険性が考えられる」と依然として水俣病再発生の恐れがあることを指摘した。

さらに入鹿山教授は「水俣湾の泥土には七層に分かれた水銀の層があるが、三十八年から徐々に層の厚さも水銀量も減っている。しかし一部には厚さ四層、五〇〇PPMという層もあり、完全に相当な水銀が残留していることも考えられる。これをどう処理するかは行政上のことが、大きな不安がある」と述べた。

ついで六反田教授は「インフルエンザとポリオ」、緒方教授は「体温調節を通じて見た体質生理学の二十四年間」と題して講演した。

会場には同学部研究生、学生ら約百五十人が詰めかけ、最後の名講演に耳を傾けた。なお入鹿山、緒方両教授は退任後熊本女子大教授に迎えられる予定。